天空の青

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天空の青

【Ｎコード】
Ｎ８０１７Ｖ

【作者名】
蒲公英

【あらすじ】
祖母が咲かせていた空色の朝顔は、誰に見せるためだったのだろう。

「ｈｅａｖｅｎｌｙ　ｂｌｕｅ」という朝顔をご存知だろうか。
夏の空を映したかのような色の朝顔は、祖母が毎年丹精してたくさん咲かせているものだった。
空を見ながら「よく見えるようにね」と言ってはいたけれど、誰に見えるのかは言わなかった。
漠然と、祖父なのだと思っていた。

それでは、「一日花嫁」という言葉をご存知だろうか。
祖母の葬儀の時に初めて聞いた言葉だった。
祖母は、一夜だけの嫁入りをして夫を日の丸で送り出したのだと。
幼馴染の仲の良さで、いずれはと誰もが思っていたのだそうだが、
戦争末期の学徒出陣が、それを狂わせた。
まだ十七歳の、子供のような妻に残ったものは何葉かの写真と生真面目な手紙。
そして、終戦を迎えてもその人は帰って来なかった。

私の祖父は、はじめの夫の弟であったらしい。
男一人に対して女はトラック一杯と言われた時代だ。
残った嫁に戻った兄弟を娶わせることは、別段珍しいことではなかったらしい。
らしいらしいで申し訳ないが、又聞きなので許して欲しい。

祖父母はとても仲の良い夫婦に見えた。
祖父が亡くなる前、祖母を片時も傍から離さない時期があった。
幼い私には、祖父がずっと祖母に甘え続けていたように見えていた。

「大事にしないと叱られるからな」

時々そう言う祖父は、誰に叱られるというのだろう。
祖母はひっそりと笑っていた。

ｈｅａｖｅｎｌｙ　ｂｌｕｅは祖母の使っていた部屋の窓より高く伸び、天に向かって花を開いている。
「おばあちゃん、誰に見せたかったの？」
十七歳の一夜だけの夫であったのか、その後長く連れ添った夫であったのか。
祖母に聞いても、けして言わなかっただろうけれど。

今日、初盆の送り火を焚く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8017v/

天空の青

2011年8月22日12時10分発行